

[書評] 福田アジオ 著 『民俗学のこれまでとこれから』

その他のタイトル	[Book Reviews] Fukuta Ajio, Folklore Studies so Far and Now
著者	安田 えり
雑誌名	史泉
巻	129
ページ	A1-A7
発行年	2019-01-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/00020707

福田アジオ 著

『民俗学のこれまでとこれから』

(岩田書院、二〇一四年一月刊行、一七五頁、ISBN 978-4-87294-885-1 C1039* 一八五〇円＋税)

安 田 え り

本書は一九七〇年代に日本の民俗学界の第一線で民俗学の方法論や課題について問うてきた福田アジオ氏による民俗学の対象や方法論の変化、今後の展望などについて論集したものである。氏は国立歴史民俗資料館名誉教授、柳田国男記念伊那民俗研究所所長などを務めている。神奈川大学は日本常民文化研究所の発展や二世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」にも貢献した。『日本村落の民俗的構造』(一九八二)、『柳田国男の民俗学』(一九九二)、『番と衆―日本社会の東と西』(一九九七)、『近世村落と現代民俗』(二〇〇二)など多くの著作を世に送り出すとともに、日本民俗大辞典の編集などでもリーダー的役割を果たしてきた日本民俗学の大家である。本書はもともとが口頭で聴衆を前にしてきた日本民俗学の大家で、文体も敬体で統一され内容が分かりやすい。他方、二〇〇〇年から二〇一二年までの間に独立して話された内容のため、章ごとで内容が重複しているという課題は残されている。

章立ては以下の通りとなっている。

第一部 二一世紀民俗学へ

第一章 二〇世紀民俗学のこれから(二〇一〇年三月)

第二章 野の学問としての民俗学(二〇一〇年五月)

第三章 アカデミック民俗学の五〇年間(二〇一二年五月)

第四章 民俗学のこれから―柳田国男から宮田登、そして今後は―

(二〇〇〇年十一月)

第二部 民俗学の可能性

第一章 歴史のなかの民俗・民俗のなかの歴史(二〇〇三年二月)

第二章 民俗学のムラ研究(二〇〇〇年十一月)

第三章 画像資料と民俗学(二〇〇八年六月)

本書は二部構成で全七章からなる。上の()はそれぞれの講演をした年である。

第一部「二一世紀民俗学へ」ではこれまでの日本の民俗学の発展と

変容について、柳田国男に重きを置いてた講演である。この歴史を経てこれからの民俗学のあり方について福田の意見が述べられている。「はじめに」で、福田は一九九〇年代からあるいは一九九〇年代の一〇年間の状況のなかで新しく出てきたアカデミック民俗学などの動向を發展とみるか退廃とみるかということ論点とすることを定義した。また、一九九〇年代の民俗学は二〇世紀民俗学からいうと退廃のものであり、それを受けて二一世紀のこの一〇年間は先が見えない状況なのではという挑発的な主張を福田は行い本文に続いている。

一九世紀民俗学は、産業革命を迎える時期、あるいは農村における様々な動きを受けて消えつつあるもののなかに価値（過去）を発見すること、つまりは起源の追及が民俗学の出発点であった。その例としてイギリスのケルトが挙げられており、当時の主義や理論から現在の民俗学とは違い、当時の民俗学は起原や価値を見出すことによつて自分たちのアイデンティティを確認する面があったと福田は説明している。そして、二〇世紀に入る頃から民俗学は変化したが、現在から過去へ確認する、把握する、理解するという民俗学の基本的な出発点は変わらないと語っている。

二〇世紀前半の民俗学は、柳田国男の民俗学「野の学問」といわれるものである。日本の民俗学は、柳田が本居宣長の国学をもとに仏心（仏教）や漢心（儒教）を除き大和心という日本的なあり方、考え方を明らかにしようとしたことに始まる。野の学問とは在野の民俗学、つまりは官に尽くさず頼らないというものであり、野で研究することを意味している。野の学問時代の民俗学は在野や民間の人たちのサークル活動としての学問であった。つまり、個人の興味・関心を自己流

で始め、そこから社会の役に立つ「経世済民」という意思のもと実践に繋げていったのが柳田である。実際に、柳田は「先祖の話」など政策や制度に関する証言も行っている。一方で、福田は村井紀の指摘を例に挙げて、柳田は国家の使命を担い、植民地支配のための方策研究を民俗学としてやろうとしたことも説明する。日本的なあり方、考え方を明らかにしようとした柳田であったが、柳田の晩年には、民俗学の流行は奇談・珍談に走り、国のための学問でなくなったことを嘆いた。しかしこのことに対して福田は、社会は変化するので、民俗学の研究テーマや主張していることも一貫しているわけではないと主張し、奇談・珍談などを研究することを認めている。

このようにして、柳田を中心に發展してきた民俗学であったが、もちろん柳田に対する批判というものは村井の他にも存在している。柳田は、「民俗学は郷土でその郷土を研究するものではない、郷土で日本を研究すること」を主張していた。だが、折口信夫は「髯籠の研究」の研究を通して「地方に居て試みた民俗研究の方法」という説を提唱し、柳田のいう全国比較の前に各地域を調査した人が結果を自ら整理し、テーマに結び付けて解釈すべきだと論じた。また、「柳田国男先生はこの学問は歴史の学として發展することを主張しておられ、それを自分は十分承知をしているが、しかし、民俗学は広義の人類学のなかに入つて發展しなければ将来はない」と民俗学は単なる歴史学ではないと主張したのが石田英一郎である。桜井徳太郎も石田の意見に賛同し、民俗学は、日本人の民俗性を明らかにする学問であると主張した。柳田の研究方法に対しても一九七〇年代に批判が出てくる。柳田は「重出立証法」を用いており、各地から入手した民俗事象を比

較して歴史を明らかにするというものであった。中央である上方から離れるほど古いものがあるという「周囲論」が矢面に立たされた。本文中には、「私も重出立証法批判、周囲論批判の文章をいくつか書いて、流布させてしまった人間ですが」とも書かれている(196)。そして、民俗学の中心であった漁村や農村の「村の解体」が起こったことよって調査をしても新しい報告が出来ないという問題点が発生した。

二〇世紀後半になるとアカデミック民俗学が誕生してくる。アカデミック民俗学は一九五八年に東京教育大学で開始され、また同年に成城大学でも文化史コースとして民俗学の専門教育が始まる。その結果、民俗学の拠点が東京教育大学・成城大学など大学になっていく。学問としての民俗学では、全国から事例を集め比較するという比較研究の絶対化というマニュアルがとられてきた。これは柳田を意識しての論である。だが、それとともに、批判精神の喪失が起きていく。また、博物館や資料館や自治体史などによって行政との関りを持つようになる。これらは、民俗学の個性が消失の性質を持っていると福田は主張する。七〇年代以降には比較研究の絶対化という考えが消失、日本民俗学の学会の民主化が始まった。

二〇世紀民俗学(後半)はアカデミック民俗学などの影響により「退廃」の一途を辿っていったと福田は説明している。「退廃」の主な例としては、分析なしの現象記述、あるいは把握という行為が行われる。そして、新しい事象を取り上げれば研究なのだという考え方が強まったのである。また、国文学と史学科から民俗学を学びだした人々の「歴史」認識の統一を行わないまま放置されてきた。その原因とし

て、この時代には、「歴史よ、さようなら」という歴史主義への反発があったことが説明されている。これに対して福田は、経験を超えた長い時間の歴史的展開の結果があるからこそ今の暮らしがある。歴史という点を消してしまえば、民俗という言葉を使う資格がない。このままでは新たな民俗学は生まれないと主張する。だが、一方では良い変化も起こっている。それは、城下町や宿場を研究対象とした地域民俗学・都市民俗学といった新しい分野が台頭してきた。地域民俗学は、研究対象の要素のみを取り出して比較していた「重出立証法」の方法では書かれた歴史がフィクションになるとし、地域の民俗誌を見ていくという方向を提示した。そして、都市民俗学(城下町や宿場)は宮田登が提唱する。宮田登の影響を受けた大月隆寛はアメリカの民俗学(フォークロア、口頭伝承、語りを重視するもの)を学び、現代の都市の独自の噂話や世間話といった民俗学を研究の対象とする。これが現在の現代民俗学の一部となっていく。他にも、日本の特色を明らかにするために中国や韓国など海外と比較する比較民俗学が誕生する。だがこれは自民族中心・自己中心的な学問であると福田は批判を行っている。環境民俗学は野本寛一が取り上げ、人間がいかに自然を認識してきたのか、その認識をどういう形で編成し、秩序を作ってきたのかということを問題に取り上げ研究を行う。このように、二〇世紀後半には柳田の時代にはなかった、領域的に新しい民俗事象の開拓や女・子ども・老人や差別など調査対象の拡大を行ったのだ。

これまでの民俗学を振り返った結果、福田の考えるこれからの二一世紀の民俗学のあり方とは、歴史認識を重要視すること、集団から個人への認識を転換すること、一国民俗学というアイヌや在日の人は除か

れている考えを改めることを挙げる。また、柳田国男以降存在していなかった批判的精神を取り戻すことや、民俗学を学ぶにあたってメンロジー（研究方法・手続き・調査法など）に大きく傾きセオリー（民俗学の認識論・歴史認識）への関心が弱かったことを改善すること、「志」を持つことが重要であると福田は語る。現在、民俗学者には自分の目的を表明する人はほとんどいない。「志」を持つことで再び野の学問へと帰依し、自ら問を出して答を作っていくことがこれからの民俗学に必要なと福田は語る。

第二部「民俗学の可能性」では、他分野との民俗学との関りについての講演をまとめたもので、第一部の内容も関わってくるが、第一部では語られなかった民俗学の定義や思想などについて福田の意見が書かれている。

第一章「歴史のなかの民俗・民俗のなかの歴史」の導入では、福田（ふくた）というのは関西地方の代々名乗ってきた小文字の歴史のように福田自身の名前を例に挙げ歴史の話に繋げていく。歴史には狭義と広義の歴史の二種類が存在しているという。狭義の歴史とは大学の史学科で慣れ親しんできた歴史学、中学高校の歴史の教科書に書かれているような歴史のことである。これらは、文字資料に依存し、政治・経済を中心としてその時代を把握し歴史を組み立てるといふものであった。一方、広義の歴史というのは、民俗学や考古学を含め、様々な学問を総合することによって政治・経済だけでない人間の総体を描く歴史のことである。しかし、それを目指すのはなかなか難しい事である。福田は語っている。それは、それぞれの学問で独自の方法や資料を扱っているからで、簡単に統一、統合という形で広義の歴史を描

けるわけではないからと説明をする。そこで、広義の歴史を目指すには、それらを総合、統一させようとするのでなく交錯させ、お互いに議論し成果を出し合い、共通の像を描くかたちに努力していくことが重要であると福田は語っている。

次に、アメリカと日本の民俗の違いについての説明を行い、社会史の登場につなげる。社会学が登場した当初、日本では社会学という言葉が広がっていった。だが、それに対して歴史学は天下国家を論じることに意義があると主張した。このような天下国家を把握し、変革を明らかにする歴史研究、大上段に振りかぶった歴史のことを大文字の歴史と説明している。つまりは、歴史に名が残った人物達の歴史のことである。一方、柳田の学問である民俗学は、常民である人々のありふれた日常を明らかにする、小文字の歴史を取り扱っていた。社会史と民俗学の違いとしては、社会史はあくまでも歴史学の中の一部であって、過去を特定の時間軸、絶対的な年代に刻印された資料で研究することである。柳田は資料に頼るのではなく非文字の素材を扱った一九三〇年代にそれを克服したのだ。そのような民俗学の事物の捉え方の例が挙げられている。一つ目は、歴史の中の民俗ということで、一六〇〇年初め頃の滋賀県甲賀市宇治河原村で一五人衆が協議決定したことを神に誓う資料と宇治河原村が隣の村と争っている資料を用いて、民俗を理解しないと行儀の歴史の理解につながらないことを説く。二つ目の民俗学の中の歴史では、民俗学のなかに狭義の歴史が示されることを滋賀県野洲市の北桜と南桜という隣り合っている二つのムラに通婚がない事例を挙げ説明している。

この章のまとめとしては、豊かな歴史へということと過去は確定し

ているが、過去時代が歴史としての意味を持つのではなく、どうやってその過去を認識し組み立てるのかということが重要であると福田は主張しまとめている。

第二章「民俗学のムラ研究」は、考古学研究者の前での講演となっている。そのため、考古学と民俗学の違いについて触れながら語られている。まず第一節では、カタカナのムラの使い方について、民俗学では漢字の村が持ついろいろな制約、危険性があるため区別をしていると説明している。漢字の村というのは明治町村制によって大量に作られた制度的なもの、あるいは戦後の地方自治体としての村のことを示す。一方、ムラは村落という通文化的な用語を示すものである。村落では、集落単位で他集落と共同慣行（行事・儀礼）が行われていることがある。このように個別の集落を基礎にして共同性がみられる地域、これをしばしばムラと呼ぶのだ。また、民俗学でムラを捉える場合、基本的にそれは社会である。ムラというのは人々が共同あるいは連帯しているという社会としてのムラである。日本の民俗学の特徴は史料や語りはあくまでも脇役であり、重要なことは実際に行われている行為であるというとする。第二の特色として、歴史を明らかにすることである。この歴史というものに対して、考古学や歴史学の方は「何時代のことですか」と質問されるが、「時代は現代としか把握できません」としか言いようがないと福田は説明をしている。これが民俗学の持っている限界であり、また歴史と言っても過去の時代を特定して持つことは基本的になく、累積された歴史を明らかにすることができるのだ。多くの民俗者の中には民俗学は日本固有文化の明らかにすることや、固有信仰を明らかにする学問であるという説明する人がい

る。そのような固有論の人たちは、本来は昔に純粹な整った姿のものがあり、それが時代を経てなくなってきたり、分からなくなった。固有のものを復元すべきだという姿勢をとっている。しかし、福田はその意見とは逆で、形成過程を経て累積しているのが現在の民俗事象であると主張している。

次に、民俗学のムラの捉え方について語られている。民俗学はいろいろな行事や儀礼を通じてムラの歴史的世界を捉えてきた。しかし、村そのものをどうとらえるかやってきていなかったのだ。一九五八年に桜田勝徳が「村とは何か」という論文を書いて以降ムラの捉え方、組織、制度、家々の関係などについての研究が登場してくる。一九六〇年代からムラ研究が本格化したのが、すでに経済の高度成長を受けてムラの解体・変質・変貌と大きく変わる段階であった。そのため、ムラ研究ではムラの実態ではなくムラという觀念あるいは意識として捉えるのが基本となっていくのだ。制度から觀念へとということでもまず初めにムラの村境や領土について語られている。これらの研究は一九七〇年代以降に盛んになったもので、村境によって内と外を分けることによってどういう意味を与えたのか、また領域はどのように編成されたのかを明らかにするものである。ここでは福田が定義したムラ世界を、同心円を用いてムラ・ノラ・ヤマと示した図が例に挙げられている。そして、家の研究の一部である先祖祭祀について位牌分けの例を用いて説明している。民俗学的ムラ研究の具体例として、静岡県小笠郡小笠町（現菊川市）の棚草の水利と氏神の関係について、静岡県下田市に存在する加増野というかつては二つの氏子に分かれていたムラが統合されて行われている寺の行事についての事例について書かれて

いる。

第三章「図像資料と民俗学」では民俗学の図像資料の利用価値について具体的な例を用いて語っている。近年では、現代のようなデジタル社会で調査を行うときに人間が描く図像が少なくなり、機械的な装置によって書かれた画像が増えてきていることが民俗学の退化につながるのではないかと語っている。図像を描くことは観察につながる行為であるとし、この点を反省しなければならないと主張する。語りと行為の民俗学について第一部にも挙げたアメリカと日本の民俗学について説明を行っている。そして、聞き書きという調査方法として、アメリカでは伝説や民謡を中心に置くが日本ではそれだけでなく制度や組織、行為を中心に記すという違いを挙げている。このように民俗学は聞き書きという方法を民俗調査の基本としていることに問題があると主張している。それは、気まぐれという間違いの情報を鵜呑みにしてしまう場合があるからだ。そこで、柳田が民俗資料の三分類行為をいう中で第一番目に行事や儀礼を含めた有形文化を観察することが必要であるとした。また、過去へのフィールドワークとして歴史離れの問題について語っている。過去の記録である日記や随筆といった文章類は研究の材料となってきたが、図像は意外に使われていなかったと語り、次の節には絵引の誕生と図像資料の活用方法や名所図会や素人絵について具体的な例を挙げ、どのようなことが読み取れるのか説明している。そして最後に、聞き書きと観察によってのみ歴史を認識するのではなく、膨大な量のある図像という資料を用いることが大切であるとしている。また、民俗学が図像に注目すれば、今まで捉えた豊かさをさらに増すことができるのではないかと主張している。

以上が本書の内容である。福田は民俗学と歴史の関係の重要性を説くが、地理学でも、地域における人間の営みの総体の変遷を描くについて研究を行った歴史地理学の研究者がいる。谷岡武雄（一九六五～七二）は「あらゆる歴史は地表上で発展され、また地理的事象は全て歴史性を帯びている」とした。また、菊地利夫（一九八七～二）は「地理学史において一貫してきた本質は、人間集団が生活するためにいかに空間を組織しているかという事象である。過去の地理とは過去において人間集団がいくたびも空間的組織をつくり変えてきた事実である。歴史地理学の対象とは、このような歴史的空間である」とした。これらの前に、藤岡謙二郎は戦後いち早く『地理と古代文明』（一九四六）を刊行して、「自然的地域基礎を無視しては地理学固有の固有領域は保全されない」と地理学の環境との関わり的重要性を説いた。さらに一九五五年には『先史地域及び都市域の研究―地理学における地域変遷史的研究の立場―』を著した。この書に対して千田稔は「本書は、先史地理学と近現代の都市地理学とを一冊にまとめ上げ、方法的意識としては、景観変遷史が歴史地理学の純正な方法でないという点をとらえて、むしろ時代を追って時の断面を復元し、その変遷を見ることとの立場こそ意味あると主張する」と説明している（野間二〇一三～一二九）。その後、藤岡は様々な調査の中で環境との相互関係を重視しながら「歴史を刻んだ土地」というミクロからマクロまでさまざまな地域で現象を捉え、その断片的な動きや持続する変化に注目したのだ。この点に関して、藤岡の理念は福田の民俗学に対する考えに通ずるものがあるのではないだろうか。

参考文献

- 菊地利夫（一九八七）新訂『歴史地理学方法論』大明堂
谷岡武雄（一九六五）『平野の地理―平野の発展と開発に関する比較歴史地理学方法論―』古今書院
野間晴雄（二〇一三）「総説 野外の地理学と地域との対話―本特集号の趣旨―」、『月刊地球』三五（三）、一二五―一三八頁、海洋出版
藤岡謙二郎（一九四六）『地理と古代文明』大八洲出版
藤岡謙二郎（一九五五）『先史地域及び都市域の研究―地理学における地域変遷史的研究の立場―』柳原書店

（関西大学大学院文学研究科・博士課程前期課程・地理学専修）